

キリスト教の成立と女性の関与に関する研究

—古代末期の聖テクラ崇敬を中心として—

Women's Involvement in the Rise of Christianity:
In the Case of Thecla Cults

足立 広明*

Hiroaki Adachi

I：キリスト教と女性

西洋はキリスト教の世界であると言われる。もちろん、全ての西洋人がキリスト教徒というわけではないし、アジアやアフリカの各地にも独特のキリスト教伝統を有する地域があるので、西洋＝キリスト教と即断するわけにもいかない。そもそも、どこまでを西洋とするのかという問題も実は我々が世界を眺める際の大きな認識枠組と絡む問いを内包している¹。だが、古代の終末期にローマ帝国がキリスト教化されて以後、東西のヨーロッパで千数百年にわたって国家と教会の双方があるときは手を携え、あるときは対立しつつも、常にその権力の拠って立つ背景をキリスト教に求める体制が持続され続けてきたことは事実である。近代の市民革命以後、王権と教会の両権は勢いを失ったが、それでもヨーロッパの文化的背景や発想の起点には無意識のうちにもキリスト教の伝統が見出される。また、地中海南岸の中世にイスラーム化していく地域においても、キリスト教社会は点在しつつ生き延びていくし、そもそもイスラーム誕生の背景にも古代末期にキリスト教化したローマ帝国が成立していたことを見過ごすわけにはいかない。

さて、このように西洋とその周辺地域の文化や歴史の成り立ちを考える上で重要なキリスト教であるが、その淵源に女性の関与の姿を見出すことは従来少なかったのではないだろうか。父なる神はもちろんのこと、子なるキリストも男性であり、一方母マリアには人間の格しか与えられていない。また、キリスト教の背景を成すユダヤ教のヘブル語聖書²の『創世記』では、最初の女性エヴァが男性アダムより先に蛇の誘惑に乗って禁断の木の実を食べて楽園追放の原因を作ったと書かれてあり、キリスト教の原罪思想の発展とともに女性は誘惑に弱い、もしくは誘惑の源とされ、男性の指導と監督に従うべきものとされていった。聖母マリア信仰が古代の地母神崇敬を継承しつつ、民衆レベルで男性である父や子を凌いで拡大したとしても、それは一方で彼女を用いて女性の母性と貞潔を称揚しつつ、他方でエヴァ的な娼婦性を断罪する表裏一体のメカニズ

ムを有する独特の神学体系に取り込まれていった。

だが、よく目を凝らすと、古代の多くの史料のなかに女性たちがキリスト教の成立に関与しようとした姿がうかがえるように思われるのである。正典聖書からは外された外典文書などの形をとるそれらの史料に現れる女性は、母や妻、あるいは娼婦といった男性との関係性における性役割に類型化することができず、むしろそうした地上における性役割からの脱出をモチーフとする物語の主人公である場合が多い。報告者が注目する女性聖人テクラはその代表的事例である。

彼女は後2世紀成立と目される聖書外典『パウロとテクラの行伝』の主人公である。小アジア中部の町イコニオン（現コンヤ）に生まれ、禁欲を勧める使徒パウロに従って婚約者を捨てて旅に出る。ところが、アンティオキアの町で暴漢に追られてパウロからも見捨てられる形になったとき、自力でこれを退けたことから逆に闘技場で野獣刑に処せられることになる。刑場では女性の支持者が彼女を応援し、雌ライオンが彼女の側に立って戦った。この渦中に彼女は神に祈って自らに洗礼を授けるのである。許された彼女は女性群衆に歓呼して迎えられ、人々を教えた後、セレウケイア（現シリフケ）近くで没したという。

このような物語は教会の正統的な性のヒエラルヒーを創出しようとする男性指導層の立場からすれば危険であり、じっさいテルトゥリアヌスはこの物語を厳しく断罪して、これにパウロの真正の教えを見出そうとする女性信者に警告した。しかし、この警告も物語の流布を完全には止めることはできず、それどころか拡大し、共感を覚える女性を増やす結果すら招くこととなった。

四世紀の末、テルトゥリアヌスから一世紀半以上も経過して、彼の地盤北アフリカよりもさらに西方のヒスパニア（現スペイン）もしくはガリア南部（現フランス・プロヴァンス地方）出身の女性巡礼エゲリアが小アジア・セレウケイア近郊に成立していたテクラの聖地ハギア・テクラ（現アヤ・テクラ）を訪問し、その感動を書き記している（地図1）。

報告者はこのような女性の物語として女性聖人テクラの一連の伝承と、彼女の物語に惹かれてその聖地に巡礼して旅の記録をとどめた女性エゲリアについて長らく研究を続けてきた。昨年は奈良大学よりの研究助成をベースにトルコのアヤ・テクラ遺跡の現地調査を行なうとともに、ひとつは愛媛大学の科研費基盤研究（B）に基づくシンポジウム・研究集会「巡礼と救済—四国遍路と世界の巡礼」に参加、研究発表を行ない、またひとつには明石書店よりシリーズ刊行予定の「ジェンダー史叢書」において初期キリスト教と女性の問題について執筆した。また、古代都市アンティオキアに関してNHK京都文化センター講演を行なった。以下、その概要を説明したい。

Ⅱ：テクラと関係するトルコ諸地域現地調査

2007年9月6日から同15日まで私はトルコを訪問し、とくにテクラに関連する諸地域を回った。まずシリアとの国境に近いアンタキヤ（古代名アンティオキア）を7日に訪れた（写真1）。アンティオキアは古代にはエジプトのアレクサンドリアに並ぶヘレニズム世界屈指の大都市で、往時は数十万の人口を擁して殷賑を極めた。紀元前300年に創建されて以後、セレウコス朝の首都、ローマ帝国の東方属州首府として栄え、636年のヤルムークの合戦でイスラームがシリアに進出するまでその繁栄は続いた。アンティオキアはキリスト教徒という言葉が最初に生まれた町であり、

ユダヤ教とは別の宗教としてキリスト教が地中海に拡大していく上で最初の要となった³。

テクラ伝承との関連では、パウロがここを拠点として活動したこと、近隣のダフネの泉の由縁として追いつがる男神アポロンを拒否して緑の木に姿を変えた娘ダフネの神話がテクラ伝承に間接的原型を与えた可能性が指摘できること、何よりも伝承第二部でテクラが野獣と格闘のさなか、自己洗礼するのがアンティオキアの闘技場であることが挙げられる（ただし、外典の実際の舞台は現トルコ中西部のピシディアのアンティオキアであった可能性が強く示唆されている）。同市は現在も人口12万を超える中規模都市で、町を流れるオロンテス川はエジプトのアレクサンドリアに近接するナイル川とは比較にならないほど小さいが、上述ダフネの泉のように山地に地中海からの湿った空気が流れ込んで雨が降り、肥沃な後背地を確保されていた（写真2）。

アンティオキアからトルコ南東部の海岸沿いに移動するとパウロの生まれた町タルソスがある。9日にここで彼を記念する教会（写真3）を訪問した後、地中海沿いの景勝地クズカレシに宿泊して9月10日にテクラの聖地のあるセレウケイア（現シリフケ）に向かった。タルソスからテクラの聖地に向かうのは古代の女性巡礼エゲリアと同じコースをたどるためであった。アンタキアからは知り合ったホテルマンの好意で彼の車で送ってもらったが、それでも一日以上かかる行程となり、往時の距離の長大さが偲ばれた。

この途中イスラーム時代の民間伝承であるが、蛇の王が王女に恋して拒否され退治される話、蛇にかまれて死ぬと予言された王女を隔離したが、ブドウの籠に潜んでいた蛇にかまれて結局その王女が死んだといういわれのある小島の古城（写真4）、「天国と地獄」といって、異界への出入り口を連想させる長径数十メートルの陥没地などに接し、伝承を育む土地柄を実感させられた。また、周囲の山岳地域には明らかに古代末期からビザンティン時代と思われる無数の洞窟跡が残されており、あちこちにギリシア語の碑銘のある石棺が放置されていた（写真5）。

アヤ・テクラのあるシリフケも現在人口6万5000を超える都市で、民俗祭典で知られる。町を流れるギョクス川は地図上では小さいようであるが、じっさいはかなりの水量があり、第三回十字軍でドイツ皇帝フリードリヒ・バルバロッサが溺れ死んだのもうなずける（写真6）。アヤ・テクラは現在地上部分は瓦礫の山となっている。しかし、五世紀後半にテクラに帰依した皇帝ゼノンの寄進によると思われる大聖堂の一部は残存し、かつての巨大さを彷彿とさせた（写真7）。聖地には地下の洞窟教会があり、管理人に頼んで入れてもらった。テクラのイコン画の前には赤い花が捧げられており、記帳書に訪問者がさまざまな思いを書き記していることから、千数百年を経てテクラ信仰がなお持続していることがわかった（写真8、9）。

シリフケからテクラの生地イコニオン（現コンヤ）まではタウルス山脈を越えて中央部の砂漠地帯を経てバスで4時間を要した。徒歩カロバなどに乗っての古代の移動を考えるとその距離は長大である。コンヤはイスラーム時代にルーム・セルジューク朝の首都が置かれ、忘我状態で踊るメヴラーナ教団で有名である。キリスト教についてはあまり知られていないが、近くに「パウロの教会」と言われるものがあり、訪れると渓谷全体にわたって現在では無人となった石窟教会と修道者の居住跡が延々と続いていた（写真10）。近年、カパドキアの石窟寺院などが観光名所として脚光を浴びているが、その一方でまったく顧みられることなく打ち捨てられた大規模遺跡も中東には多いのである。これらは古代末期からビザンティン時代の巡礼、修道生活の跡と考えて

間違いなく、テクラ信仰を育んだ文化的・社会的な背景を物語っている。

Ⅲ：四国遍路と世界の巡礼

次に、愛媛大学のシンポジウム「巡礼と救済：四国遍路と世界の巡礼」での発表とその記録について要約したい。この企画は同大学挙げての学部横断的なもので、四国遍路の世界遺産登録を目指すための一環という意味もある。世界の巡礼との比較ということで私にも参加の打診があり、たまたま前述のトルコ現地調査の直後であったこともあり、写真なども交えて報告した。報告会は9月29日・30日のプレ・シンポジウムと12月8・9日の公開シンポジウム・研究集会の二度に分かれ、私はその双方で発表の機会を得た。プレ・シンポジウムは八十八箇所の寺のひとつ（仙遊寺）に宿泊し、朝の勤行にも参加するなど臨場感のあるもので、キリスト教と仏教の違いはあるものの、貴重な実体験を得ることができた。

拙報告はプレ・シンポジウム（29日夜仙遊寺宿坊にて発表）においては、ほぼ前述のトルコ現地訪問の紹介であり、公開シンポジウム・研究集会においては一部現地の写真も交えつつ、全体的な古代末期のキリスト教巡礼の諸相とそのなかでの女性の役割について話した。後者の公開シンポジウム・研究集会のプロシーディングズはすでに公刊されているが、その報告者担当部分を要約を以下に示しておきたい⁴。

拙報告表題は「古代末期のキリスト教巡礼の諸相」とし、最初にキリスト教巡礼の始まりと古代末期におけるその拡大について論じた。キリスト教の巡礼は迫害時代にさかのぼらせることもできるが、社会的実態として登場するのは四世紀初頭のコンスタンティヌス帝によるキリスト教公認と帝国再統一以後である。313年のミラノ勅令でキリスト教を公認して以降急速に同宗教に接近していったコンスタンティヌスは、324年に帝国を統一するや、翌325年にニカエア公会議を召集して正統信仰確立に介入する意思を見せ、翌326年には皇太后ヘレナがイェルサレムを訪問、これ以降帝国の肝いりでパレスティナにキリスト生誕教会や聖墳墓教会などが建設され、そこを詣でようとする巡礼のために街道も整備されはじめた⁵（地図2）。

巡礼はやがて皇帝の思惑を超えて隆盛を極めることになり、モーセやアブラハムなどのヘブル語聖書の預言者やイエスと使徒たち、それに迫害時代の殉教者などのゆかりの地を詣でて、霊験あらたかなその聖遺物を得ようと、東方だけでなく遠く西方の各地から巡礼が訪れるようになった。巡礼を迎えたのは正規の聖職者だけでなく、砂漠で修行をする原初期の修道士も数多くいた。これらの砂漠の修道士もまた厳しい修行で高度な霊的能力を持つと信じられ、周辺の村人の争いの調停や、場合によっては都市や帝国のもめ事にまで介入する力を示した。殉教者と同じく彼らの遺体や衣も聖遺物となって珍重されたが、場合によっては生前から彼らの触れた物に霊験を認める風潮も高まってきた。西方からの巡礼はこうした過去や同時代の聖なる事物を持ち帰り、あるいは目に焼き付けてその光景を故郷で語ることでキリスト世界を拡大させた⁶。

このような修道生活やそれと連動する巡礼熱の高まりの中で、女性もまた大きな役割を果たした。女性の場合、高位で富裕な場合でもローマやコンスタンティノープルの元老院や、あるいは地方都市の参事会などで公的な立場から発言する権利はなかった。財産の行使にも親族男性の介

入があったし、遠方を旅し、意見を交換する機会も制限されていた。だが、教会や修道院への寄進や貧民救済事業、それに巡礼の旅は「私的」なスペースであり、そこに女性たちの「自由な」活動の余地が残されていたのである。大メラニアとその孫娘小メラニアなどの事例はとくに目を引くが、それ以外にも古代末期に巡礼と修道生活を通じて名声を博した女性は数多い。身分の低い女性の場合でも、親族の支配を離れて旅し、学習する機会が得られることは大きな魅力であったろう。彼女たちがじっさいに実利的な計算をしたかどうかは不明であり、おそらくは多くの場合信仰が先行していたと推測されるが、結果としてこのような「自由」の場を押し広げた。

テクラの聖地を訪問した女性巡礼エゲリアはこのような風潮を背景にして旅した。彼女は四世紀末、381-4年にイェルサレムを基点にモーセやヨブ、アブラハム、それにイエス自身に関係する東方の聖地を巡り歩いたが、その旅の終わりに上述シリアの首府アンティオキアからタルソスを経てセレウケイアのテクラの聖地まで詣でるのである。報告者が注目するのは、彼女がほかの聖地ではおのれを空しくする巡礼の気持ちからか、あまり一人称単数の主語「私」を用いず、また会見した男性主教や修道士の名も意図的にか落としているのに対し、なぜかハギア・テクラにおいては自らの喜びを隠すことなく「私」という主語で表現し、その「私」が現地で女性修行者を監督する同性の友人マルタナと会見する感激を相手の実名を交えて書き残している。報告者はそこに古代における女性の自己表現のひとつを見出し、それを可能としたのがテクラの信仰であったと考え、そのように報告したのである⁷。

Ⅳ：古代キリスト教とジェンダー：テクラ信仰—越境と自立の神話

さて、昨年度後半に報告者は明石書店より今秋公刊予定の『ジェンダー史叢書』第7巻『人の移動と文化の交差』において本章章題と同じ「古代キリスト教とジェンダー：テクラ信仰—越境と自立の神話」と題してその第一章を担当した。内容については以下要約する。

本稿では叢書の性格を考慮して、古代末期のテクラ信仰に先行するキリスト教の出発点における女性の役割にかなりの比重を置いて論述し、既存のフェミニスト神学で共有されている知見を集約した。その上で新約聖書学の視界からは遠ざかるが、地中海世界がじっさいにキリスト教に転換する重要な時期である古代末期において女性の自立的メッセージを発信するテクラの物語と女性の信仰について論じた。

冒頭でも指摘したように、キリスト教は父と息子の二つの現れ方をする一つの神という概念を中核とする極めて男性中心的な宗教である。それはたまたまそうなったのではない。キリスト教がユダヤ教やローマ社会の父権制を背景として誕生してきたという歴史が背景に存在している。この歴史の刻印を無視せず、それを現実として受け容れることから歴史学の、またジェンダーの観点からキリスト教成立史を点検することは始まるのである。問題はこの歴史的制約のなかで、女性はどのようにキリスト教の成立にかかわってきたかという点である⁸。

この点に関しては、幸いこの四半世紀に女性学への関心の高まりとともに邦語文献も増加し、邦語で現段階の知見にかなり接近した共通見解を得ることができる。エリザベス・フィオレンツァの大著や、その翻訳者である山口里子氏のモノグラフ、また荒井献氏や山形孝夫氏の業績な

どがその主なものである⁹。拙稿ではこれらの先行研究に導かれつつ、また一部邦訳のないユダヤ・フェミニスト研究者にも拠りつつ¹⁰、福音書に描かれる女性たちの主体的な歴史参加への道筋を明らかにしようとした。

四福音書で共通しているのは、一番弟子ペテロを中心に男性弟子たちを称揚しようとする方向に進もうとする方向性であるが、注目すべきはそれでもなおイエスの事跡の重要な証人としての女性の姿を消し去ることができないということである。とくにマグダラのマリアに関しては、逃亡したペテロに代わって、イエスの十字架における死から復活に至るまでの、いわば救済宗教としてのキリスト教の奥義を開示する核心部分での証人の役割を担っている¹¹。また、彼女以外にもカナンの女、もしくはフェニキアの女とされる女性は神の救済の対象をイスラエル人のみに限定しようとするイエスの姿勢そのものを批判して改めさせている¹²。福音書以外でも、たとえば「ローマの信徒への手紙」ではパウロはフェベヤトリファイナなど女性の指導者・監督に信頼を寄せ、彼女たちの家の教会を頼って男性たちも迫害下には布教を進めざるをえなかった実情がうかがえる¹³。

このトリファイナはテクラの行伝でもテクラを救い、その伝道事業を手助けする重要な役目を果たす。パウロの弟子の系統が書いたと思われる正典聖書の牧会書簡ではテクラの行伝と記述が重なりつつも、テクラ行伝とは逆に激しく女性の服従と沈黙を命じているのだが、新約聖書学者のデニス・マクドナルドはここから類推して、おそらくパウロに権威を認められた女性たちの口頭伝承によるキリスト教伝統があって、そのなかで女性使徒テクラの物語が形成されたのだが、これに危険を感じたパウロの男性弟子たちがこの伝統を抑圧するために激しい言葉で女性を押さえ込もうとしたのが牧会書簡であると結論づけている¹⁴。史料操作は綿密で無理はなく、報告者も基本的にこの見解に賛同するものである。

ただ、こうした80年代のフェミニスト神学研究者は古代末期への関心が弱いことと、その楽観的な見取り図に対しては、最近言語論的転回を経たテキスト分析の理論を用いる研究者から異論が出始めている。その論陣の一角にはなんとかつて古代末期の女性の「自由」の場の拡大を提唱したフェミニスト歴史家自身も加わっており、看過できない¹⁵。その論点をごく簡略に記すと、テクラ行伝も含め、古代末期の女性聖人伝は基本的に男性作家の手になるものであり、そのプロパガンダ的色彩を逃れることはできないというものである。同時代になお強勢を誇った「異教」の世俗世界の継続を是とする恋愛小説に対して、禁欲とあの世の救済の優越を説くために創作された物語であるという読み方は、たしかにテクラ行伝の一面の性格を言い当てている¹⁶。

しかし、このようなベシミスティックな見取り図は全面的に従来のフェミニスト研究者の構築してきた視点と入れ替わるものではないだろう。なにより、この説明方法では、なぜテクラの物語がテルトゥリアヌスなど教父に危険視されたのが説明できない。テクラの自己洗礼や彼女を応援する女性集団は男性指導層の禁欲的プロパガンダには不必要な場面であり、じっさい後世には削られ、改作されることになる。なぜこのような場面が描かれたのだろうか。また、単なるテキスト理論ではなく、女性が使用したと思われる籐やテクラという名の女性の墓碑、そして彼女の苦難に思いを重ねたらしい、流刑にされた女性たちの壁画、また前述のエゲリアの記述などの実態的な証拠からは、巡礼や修道生活で旅する女性たちの実在と、その模範としてのテクラへの

崇敬があったことが確かめられるのである¹⁷。

まとめと展望

さて、奈良大学助成を得て、前年度は以上のように多忙ななかにも充実した研究生活を送ることができた。女性聖人テクラと巡礼エゲリアに関する研究は、古代末期のキリスト教とモラル観の変化、家族生活と女性の地位の変動、古代末期の言説と社会実態の関係など多方面の研究に転化しうる可能性を有している。そのような研究を通じて、やがて「西洋」と称せられる世界の基層部分が形成された古代末期の社会変容の姿の一端なりとも明らかにできれば、と考えている。

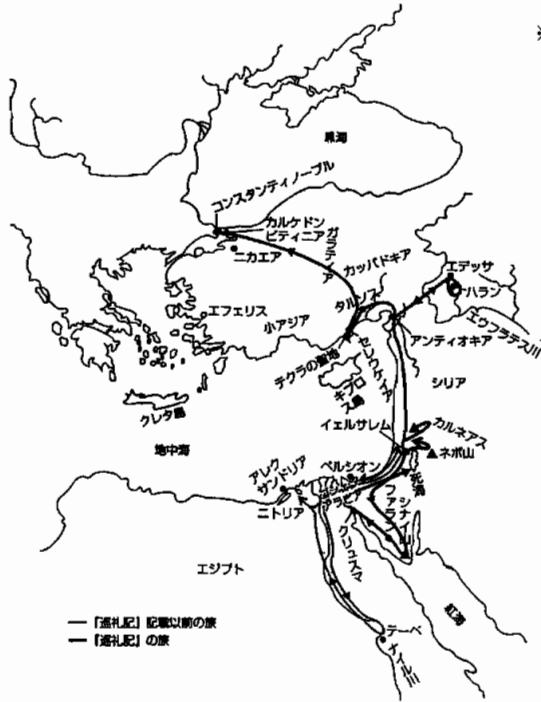
今後もいっそう各方面のご理解とご助力を賜れば幸甚である。

注

- 1 さしずめ、次の書などが参考となろう。エドワード・サイード著、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』上・下、平凡社ライブラリー 11および12（単行本としては1986年翻訳刊行、1993年に文庫化）。
- 2 「旧約」聖書という言い方はキリスト教を中心に据えた言葉であるため、ここでは「ヘブル語聖書」という用語を採用した。
- 3 古代アンティオキアに関しては、年度末2008年3月31日にNHK京都で通年講座「遺跡にみる地中海世界の歴史」（同志社大学教授中井義明・同講師坂井聡・立命館大学教授大戸千之と共同）の最終回として講演した。演題は「アンティオキア：聖人たちの交錯する町」である。講演では同市のモザイク博物館で撮影した同館所蔵のコレクションなどを適時紹介の上解説した。
- 4 尾立広明「古代末期のキリスト教巡礼の諸相」：愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム実行委員会編『巡礼と救済－四国遍路と世界の巡礼：公開シンポジウム・研究集会プロシーディングズ』（愛媛大学、2008）22－33頁。
- 5 キリスト教巡礼全般についてはHunt, E.D., *Holy Land Pilgrimage in the Later Roman Empire: AD312-460*, Oxford, 1984に詳しい。
- 6 キリスト教巡礼と記憶については近年次の研究を得た。Frank, Georgia, *The Memory of the Eyes: Pilgrims to Living Saints in Christian Late Antiquity*, Berkeley, 2000.
- 7 報告者のこの考えを最初に示した論考は、「古代末期のキリスト教巡礼と女性－エゲリアの場合」歴史学研究会編集『地中海世界史』第4巻『巡礼と民衆信仰』（青木書店、1999）63－93頁。
- 8 キリスト教の歴史的制約と女性の役割に関する問題設定についてはエリザベス・S・フィオレンツァ著 山口里子訳『彼女を記念して：フェミニスト神学によるキリスト教起源の再構築』（日本基督教団出版局、1990）17－33頁「序 女性の歴史遺産を探し求めて」参照。
- 9 山口里子著『マルタとマリア：イエスの世界の女性たち』新教出版会、2002）、荒井献著『新約聖書の女性観』岩波セミナーブックス27、（岩波書店、1988）、エレヌ・ペイゲルス著 絹川久子・出村みや子訳『アダムとエバと蛇：「楽園神話」解釈の変遷』（ヨルダン社、1993年）、カレン・L・キング著 山形孝夫・新免貢訳『マグダラのマリアによる福音書』（河出書房新社、2006）など。
- 10 Kraemer, Ross S., *Her Share of the Blessings: Women's Religions among Pagans, Jews, and Christians in the Greco-Roman World*, N.Y., 1992.
- 11 荒井、前掲書89－95頁、付録「イエスとマグダラのマリア」同371－394頁。
- 12 「カナンの女の信仰」『マタイによる福音書』15章21－28節；「シリア・フェニキアの女の信仰」『マルコによる福音書』7章19－30節。
- 13 『ローマの信徒への手紙』16章1－16節。
- 14 MacDonald, Dennis R., *The Legend and the Apostle: The Battle for Paul in Story and Canon*,

Philadelphia, 1983, pp.55-77.

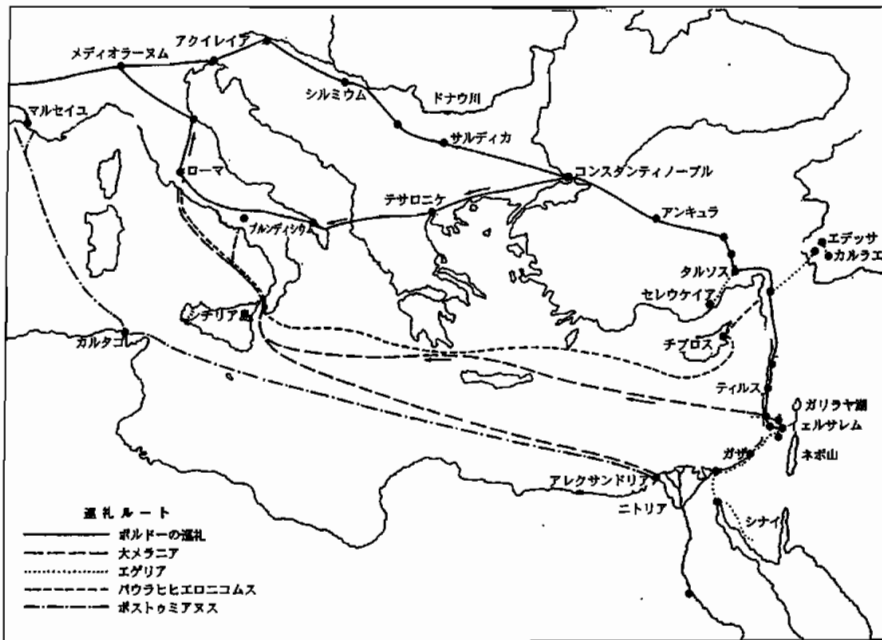
- 15 Clark, Elizabeth A., "The Lady Vanishes: Dilemmas of a Feminist Historian after the "Linguistic Turn"", *Church History* 67-1, 1998, pp.1-31; " Women, Gender, and the Study of Christian History", *Church History* 70-3, 2000, pp.395-426; *History, Theory, Text: Historians and the Linguistic Turn*, Harvard, 2004.
- 16 Cooper, Kate, *The Virgin and the Bride: Idealized Womanhood in Late Antiquity*, Cambridge, 1996, esp. pp.62-65.
- 17 Davis, Stephan D., *The Cult of St. Thecla: A Tradition of Women's Piety in Late Antiquity*, Oxford, 2001. (pp.150-172で、とくにエジプト、カルガ・オアシスに追放された女性修道者たちによるテクラ崇敬を表すものとされる壁画について詳しく書かれている).



※地図はそれぞれ「巡礼と救済—四国通路と世界の巡礼」の26頁に地図1を、同23頁に地図2を掲載。

地図1 エゲリアの巡礼ルート

歴史学研究会編『巡礼と民衆信仰』青木書店、1999、拙稿「古代末期のキリスト教巡礼と女性—エゲリアの場合」p.70より引用。



地図2 E. D. Hunt, Holy Land
(Pilgrimage in the Roman Empire, AD312-460, Oxford, 1984, p. 53より引用)



(写真1) アンタキヤの町とオロンテス川



(写真2) ダブネの泉



(写真3) 聖パウロ生誕教会



(写真4) 王女の島 (クズカレシ)



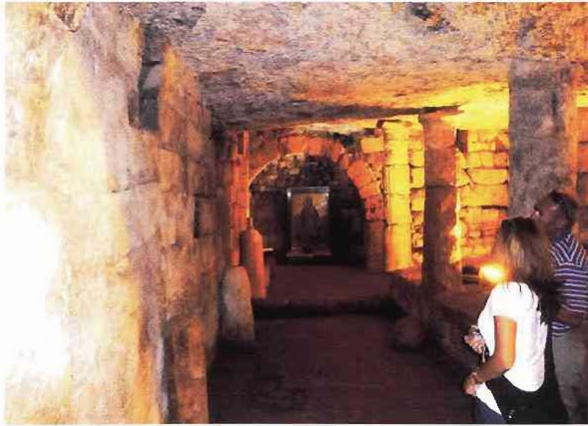
(写真5) うち捨てられた石棺



(写真6) シリフケの町とギョクス川



(写真7) アヤ・テクラ聖堂地上部分



(写真8) アヤ・テクラ聖堂地下部分



(写真9) 聖テクラのイコン画と献花



(写真10) コンヤ近郊の「パウロ教会」石窟群